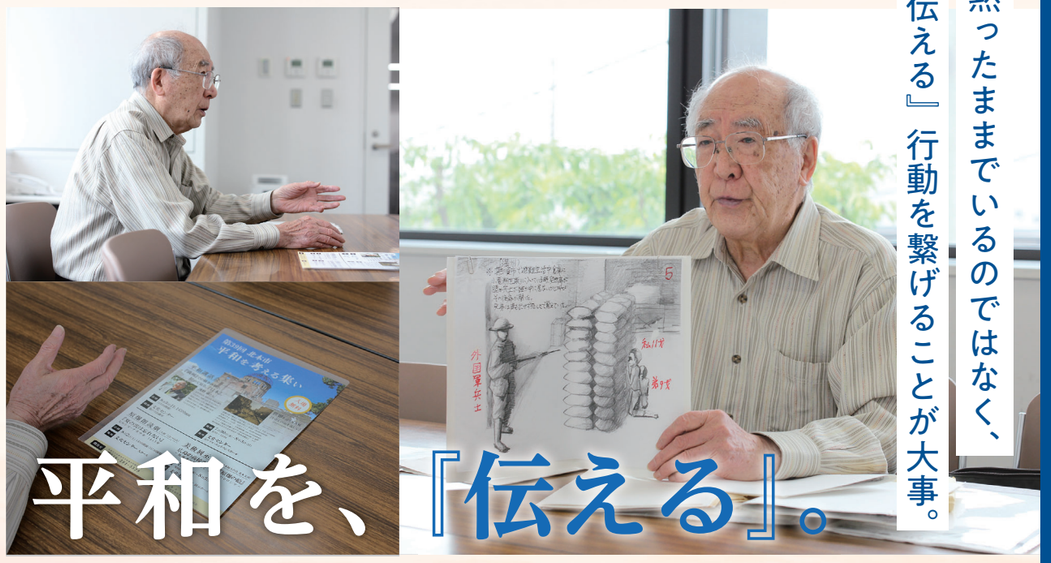
［特集］

終戦80年 平和を『伝える』、『学ぶ』、『考える』。

黙ったままでいるのではなく、『伝える』行動を繋げることが大事。



人々の暮らしと心が豊かである世のために。

終戦80年の節目である令和7年。8月3日（日）開催「第39回北本市平和を考える集い」平和講話会で講師を務める浅野卓さんに、旧満州での戦争体験や辛く苦しい日々と、語り部を志すきっかけや、これからの未来に伝えたいことを伺いました。

軍国主義と少年時代

私が旧満州・牡丹江（ぼたんこう）市の小学校に入学した昭和16年の12月に、太平洋戦争が勃発しました。軍の権力が高まり、言論統制や反発する国民の連行が行われるように。学校でも授業は午前中だけで、午後は勤労奉仕（農仕事）、4年生になると軍事訓練（銃剣術訓練・行軍等）をさせられました。牡丹江市には前線基地があったため、米軍のB-29爆撃機が軍施設を空爆し、その度に避難していました。

昭和20年5月頃、日本軍の戦力低下により家族で牡丹江市を離れることに。屋根のない列車に乗り、二日間かけて南下。吉林（チーリン）通過中に「昭和天皇陛下の玉音放送」を聞いて日本の敗戦を知りました。そうして辿り着いた撫順（ぶじゅん）市で、終戦後の生活が始まったのです。

《旧満州の地図》浅野さんは大連に生まれ、牡丹江で戦争を体験し、戦後は撫順で生活した。

満州でのどん底生活、そして日本へ

撫順市では、父が勤務していた南満州鉄道の社寮で生活していましたが、父が土木現場に出かけたまま行方不明に。当時11歳の私と9歳の弟は毎日炭鉱へ行き、コークス（※1）を拾っては市場で売り、売上金で高粱（コーリャン）（※2）や豆腐等を買って食べていました。生きるために必死で、小麦粉倉庫から小麦粉を隠し持って逃げ帰ることも。そんなある日、倉庫に外国人兵士が現れ、「誰かいるのか」と銃口を向けられました。息を殺して隠れていると、やがて外国人兵士は去っていきました。

振り返ると、撫順市での一年間は生きるために耐えたどん底生活でした。

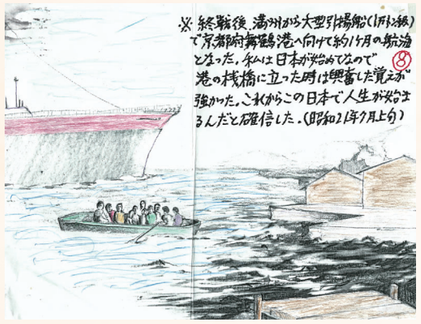
《浅野さんと北本高校美術部が共同制作したイラスト》
浅野さんは弟とともに炭鉱でコークスを拾い集め、集めたコークスは母親が市場で売り、そのお金を生活費に充てていた。

※1 コークス…石炭を蒸し焼きにした燃料。
※2 高粱…モロコシ（トウモロコシとは異なる）という穀物の別称。

昭和21年5月頃、日本への引揚げが決定し、1万t級大型引揚船「興安丸」に乗船し、葫芦島（ころ）の港から出航しました。荒波で嘔吐する者、発疹チフスで亡くなる者が続出し、船内で遺体を保管できず、海に流ざるを得ませんでした。

ある日、月明かりが照らす甲板上で、乗船者が民謡「江差追分（えさしおいわけ）」を尺八で演奏しているのを聴いたことを印象深く覚えています。

約1か月に渡る船旅の末、昭和21年6月下旬に京都府舞鶴港に入港。初めて日本の情景を目の当たりにし、桟橋に立った瞬間、「ここが我が国『日本』なんだ。これからこの日本で人生が始まるんだ」と、強く確信したのです。



《浅野さんと北本高校美術部が共同制作したイラスト》
大型引揚船で舞鶴港に到着し、初めて日本に足を踏み入れた。

戦争を現代に伝える「語り部」誕生秘話

日本で小学校～大学を卒業してからは安全管理の仕事に約30年従事しました。建設現場を指導するため、社会保険労務士や安全管理者等の資格を取得。労働組合の活動にも参加して、交渉スキルやコミュニケーション能力が向上し、人前で話す自信がつきました。

平成23年、西中学校の便りで「社会人に語ってもらうコラム」の取材先を募集していたことがきっかけで、当時の校長と話し、西中学校や北本中学校で講演を行うように。友人からの助言で、令和元年～2年頃に北本高校美術部と共同で戦争体験をイラスト化し、講演で使うようになりました。

その後、数々の教育現場や地方自治体、テレビ、ラジオ、新聞等への講演や出演を経験し、「戦前・戦中・戦後を物語風の構成で話す」語り部のスタイルが確立しました。

現在も絶えない戦争「平和」とは何か

現在も戦争中の国がありますが、個人個人が、どうしたら平和に溺れず、残酷な戦争を起こさずに済むか、平和な時代が長く続くかを考えてほしいと願っています。力で抑え込み、人を殺（あや）めて他国の土地を占領し、死者を何万人と出すことは非常に卑怯で許し難い。国内に留まらず世界の動向に関心を持ち、常に危機意識を抱きながら国際的に連携して、戦争を抑える方法を皆で考えることが必要です。残酷、悲惨で苦難多き戦争を、二度と繰り返してはなりません。

昨今は、SNSでの誹謗中傷やいじめが社会問題になっていますが、命を大切にできる平和な国がどれだけ得難く素晴らしいことかを理解し、豊かに生きることを互いに尊重し合えるような世になってほしい、平和な時代が永久に続いてほしいと、切に願います。

《浅野さんと北本高校美術部が共同制作したイラスト》
撫順市の浅野さんが住んでいたアパート近くのごみ置き場で地雷が爆破し、ごみ出しにきた数人の日本人が犠牲になった。

浅野卓（たかし）さん（91）

北本市在住。昭和9年、父親の勤務地（南満州鉄道）である旧満州大連市で生まれ、5歳の時に父の転勤で牡丹江市に移住。昭和16年、7歳で牡丹江市の国民尋常小学校に入学し、同年12月に太平洋戦争が勃発。激動の戦中戦後、悲惨と苦難の生活に耐え、大型引揚船による約1ヶ月の長い船旅の末、昭和21年6月下旬、京都府舞鶴港に入港し、生まれて初めて日本の土を踏む。

現在は語り部として、数々の新聞、ラジオ、テレビ等の取材や、自治体及び教育現場等での講演を引き受け、軍国主義に扇動された当時の社会情勢や敗戦後における満州からの引き揚げ等、自身の体験を語り継いでいる。